昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）昭和52年3月1日発行　通巻6[illegible]号

ヒマラヤ

HIMALAYA

1977年3月号

日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

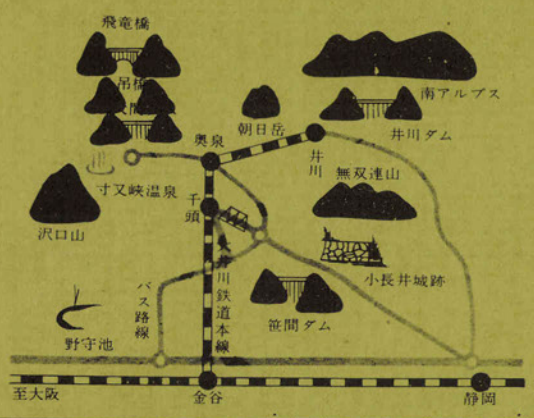
＊＊＊ HAJヒマラヤ集会のご案内 ＊＊＊＊＊＊＊

東京定例集会　18時30～20時
場所　有楽町トラベル日本「ラクチョウビル」
　　5F会議室　☎572－1461
2月26日(土)パミール・中央アジア（3月26日は中止）
4月8日　ガルワル・ヒマラヤ情報
　　8月のラダック・カシミール登山、ツアーの打合せも行ないます。（4月22日は中止）

中部地区定例集会　18時30～20時
3月11日　インドヒマラヤ速報
　名駅前ホテルニューナゴヤ747号
4月9日(土)ヒンズークシの旅（岐阜）
　岐阜南市民会館・岐阜市加納丸ノ内
名鉄、国鉄「岐阜駅」より徒歩20分。
なお、9日夜～10日（日）にかけて小登山をします。

ヒマラヤ地図研究会　2月24日夜（京都）場所未定

HAJ・ビスタリクラブ例会　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＜期日＞　6月4日（土）　5日（日）　1泊2日　＜費用＞　4,500円(小人3,000円)当日、受付で。
＜場所＞　寸又峡ー南アルプス表登山口。沢口山（4時間）登山、飛竜橋などへのハイキング。
＜申込＞　ハガキでビスタリー・クラブ黒沢文代
＜宿泊所＞　寸又ヒュッテ
　　バスの終点「寸又峡温泉」で下車。坂道を下って温泉入口へもどった左側。道路をはさんで右側に無料駐車場あり。（雨天の場合は、ヒマラヤの話やスライドなどを楽しみます。）



交通ご案内
東海道線金谷駅で下車し、電車・ジーゼルカー・バスと乗次いで変化に富んだ大井川の車窓風景が楽しめます。寸又峡温泉ゆきバスが兎辻峠を越えるころから眼下に数十米の断崖を望みスリルが強すぎますが安全運転で心配はありません。

● 金谷 ―電車― 千頭 ―ジーゼルカー― 奥泉 ―バス―
　1時間　バス直通1時間
　―― 寸又峡温泉

● ドライブには静岡から清沢、洗沢峠を越えるコースがあり、2時間で到着します。

◇◇◇◇◇◇◇ 「ヒマラヤ」　3月号目次 ◇◇◇◇◇◇◇

ヒマラヤへの誘い…… 1
講演と映画の会予告
　「ヒマラヤのかなたへ」…… 5
＜ヒマラヤ紀行＞カラコルムの山旅 (4) …… 6
ヒマラヤ閑話
　「深田久弥旧蔵書目録」のこと…… 8
＜中央アジア紀行＞ブハラの秋 …… 9
HAJ新刊予告
　「中央アジア・シルクロード」…… 10
＜中央アジア・ガイド＞
　中国領中央アジア…… 11
＜読者だより＞日本からヒマラヤへ…… 14
＜H＆Sのページ＞コムニズム峰登頂…… 15
HAJ新刊予告「シェルパの履歴書」…… 16
HAJ・アフガニスタン報告会・
報告書発行…… 17
＜関係の機関・団体　その4＞
　アジア経済研究所…… 17
＜H＆Sのページ＞インド通信 (8) …… 18
書評「東海山岳 第4号」…… 19
HAJの本　特約店紹介 ― その2
　札幌・成美堂書店…… 20

表紙画・今村朋信（訂正とお詫・2月号の表紙画も今村さんでした。）

ヒマラヤへの誘い

Joginder Singh
インド航空旅行開発部担当

ヒマラヤというと、好奇心、尊敬の念、神秘な美しさを呼び起こさせる。それは文字どおり「雪の住家」を意味し、インド人の心や哲学を支配している。ヒマラヤと神聖なることとは、遠い昔のインド大陸の人々にとって分けることのできないものであった。平地を流れる川は最も神聖なものに属する。インド・ヒンズーの有名なシンドゥ川・インダス川や、神聖なるガンジス川・ジャムナ川・サラワジ川・ブラマプトラ川の源はすべてヒマラヤ山脈である。この最も高い山々は中国へ流れる揚子江や黄河、タイへ流れるメコン川、ビルマへ流れるサルウィン川の水源でもある。また、インドの中央平原も半世紀の間にヒマラヤの土壌によって作られた。

東西およそ3,600㎞に伸びる巨大な自然の城壁であり、インド大陸へチベットやシベリアから吹いてくる氷のように冷たい風や風雪を防ぐ楯の役割をしている。それはあたかも偉大な叙事詩を思いおこさせる。マハーバラータを書いた有名な哲人のビヤス(Vyas)はバドリカスラマ(Badri-kasrama)の森に住んでいた、バシスタ(Vasistha)は聖人で予言者であり、莫大なヨガの説明を書いた世捨て人である。偉大な仏陀はヒマラヤのふもとで生まれ、その愛と非暴力の思想はヒマラヤにもまさり、そびえ立つ山々から流れる川のように国々を神聖なものに浸していく。

慣習はおそらく紀元前3世紀の初期に明確な形をとりはじめ、それは修道院や霊廟の巻き物、聖書、絵画、遺跡から見つけられるであろう。

ひとたび山のふもとにやってくると、ヒマラヤは頭上高くにあり、人々に最も崇高な考えや精神を与える。山々は人々の心の中に、すばらしい魅力を投げかけてくれる。人々はこの自然の全く信じられないような不思議な中で、絵画やスケッチや写真の隠れた才能を見つけることができる。多くの人は休みなくトレッキングに行き、行った先々で楽しみを見つける。そしてまだ荒らされていない谷でたくさん咲いている野生の花の香りのする、きれいで雄大な空気を吸うことができる。また、多くの人は大胆にもヒマラヤの高峰を登りにくる。ヒマラヤの広範囲にわたる解禁に伴い、今や多くの新しい地域が、外国の旅行者に開放された。

東部ヒマラヤのダージリンから、旅行者は世界第3位のカンチェンジュンガ(8,598m)を眺めることができる。まん中にはカンチュンジュンガに見おろされた低く横たわっている谷があり、そこの人々はカンチェンジュンガを「神の座」として崇敬している。カンチェンジュンガは20世紀のはじめに世界中の登山者のねらいの的で、たくさんの遠征隊が登頂を試みたが、1956年にイギリスの遠征隊が頂上に登ることに成功しただけである。

しかし、この谷の地方の人々の感情を尊重し、約束を守って彼らは頂上の2、3フィート手前で登ることを思いとどめた。この遠征隊の記事は「人跡未踏の頂上」と名づけるのにふさわしいであろう。

ダージリンの近くの「タイガーの丘」(Tiger Hill)から見る日の出は、筆にも口にも表現できないほどの体験であろう。サンダクプー(Sandakphu)はジープで簡単に近づけ、堂々としたエベレストを含むヒマラヤのまたとないパノラマを、旅行者に見せてくれる。その地域はおびただしい数の魅力的なトレッキングのルートがあり、鳥を観察したり、蝶々を捕えたりする人々を喜ばせる。

外国の旅行者は今では有名なナンダデビーの聖域を訪れることができる。そこは1939年まで奥深くへ行くことができなかった。そこは「花の谷」(Valley of Flowers)と「ハリキドンの谷」(Harki-Dun Valley)でバドリナートとケダルナートの巡礼者の偉大な聖地がある。旅行者は時の流れからのがれてまだ存在しているラホールとスピティの隔絶された谷を探検することができ、それとともにその慣習や信仰が100年たっても変化していないことを見ることもできる。このような隠された谷は、先天的に束縛されずに繁栄するような環境を持っている。政治的にも地理的にも孤立しているため、インド地方で100年も前にさかんに行なわれた仏教徒のスポーツが、その起源の場所ではほとんど消滅してしまっているけれど、こ

れらの谷ではまだ残っている。

＊＊ラダック＊＊＊＊＊

ラダックの谷々は今日、旅行者に発見されるのを待っている。レーはラダックに含まれ、古くから商業道路の集まる地点であり、今では外国人も訪れることができる。ラダックの中で、過ぎ去った年月やユニークな文化を見ることができる。そこはおそらく本当の宗教分離が習慣として残っている世界でただ1つの地方であろう。他のどの地方でも、仏教徒の少女と回教徒の少年の結婚式を見ることができない。そして仏教徒の少女は新しい家の信仰に従い、その逆もまた同じことである。このような婚姻はここラダックでは両方の家で寛大に認められる。そういう家庭では、3人の子供に3つの違った信仰を教える。1人は仏教、もう1人は回教、あとの1人はキリスト教といった具合いで、全員が同じ屋根の下に住んでいる。

ラダックの面積は97,872㎢で、ジャンム・カシミール州全体の地域の70％で、地球の最も高い地方の1つである。人口は11万人で、世界中で最も人口密度の低い地方の1つでもあり、それは1平方キロにつき約1.2人である。何キロも広がった、山からの風に吹きつけられた荒涼として乾燥したところで、まだ人間や鳥や動物や木でさえも目につかないところをあちこちと、たった1人で運転しなければならない。ラダックの主要都市であるレーは絵のように美しい町で、まるで昔の世界を思い起こさせ、海抜約3,300 mをこえ、インダス川の北の川岸にある。レーはさまざまな文化が奇妙に混ざっていたり、昔や現代の建物が混合しあっているところである。

ここでは東西の合流ばかりでなく、南北の合流も見られる。歴史的なキャラバンの道はレーでカラコルム峠経由でヤルカンド(Yarkand)、コータン(Khotan)、カシュガル(Kashgar)へつながり、もう一方ではチベットのラサにつながり、またもう一方ではバララチャラ、ロータン峠経由でインド平野へもつながっている。中央アジア幹線道路はおそらくこの100年の間に、魅惑的なこの地方に入る、ただ1つのルートであろう。インダス川は近くまで曲りくねって流れ、ここで川幅が広くなり、途中の島によって分かれて流れていく。南へ開けた谷を渡って、レーの町は、澄んだ空気の中に鋭くそびえるヒマラヤの雪の山々の尾根を背景に、日没に山々が銀色の川の上に、バラ色に燃えるように輝くようなところである。町の家は、種々様々な泥のレンガでできており、各自で木製の玄関の柱に彫刻したり、窓わくを塗ったり、バルコニーを作ったりするので、さまざまな建物が見られる。夏の終りになると平らな屋根の上に、冬の家畜畑から取ってきた干草が積み上げられる。

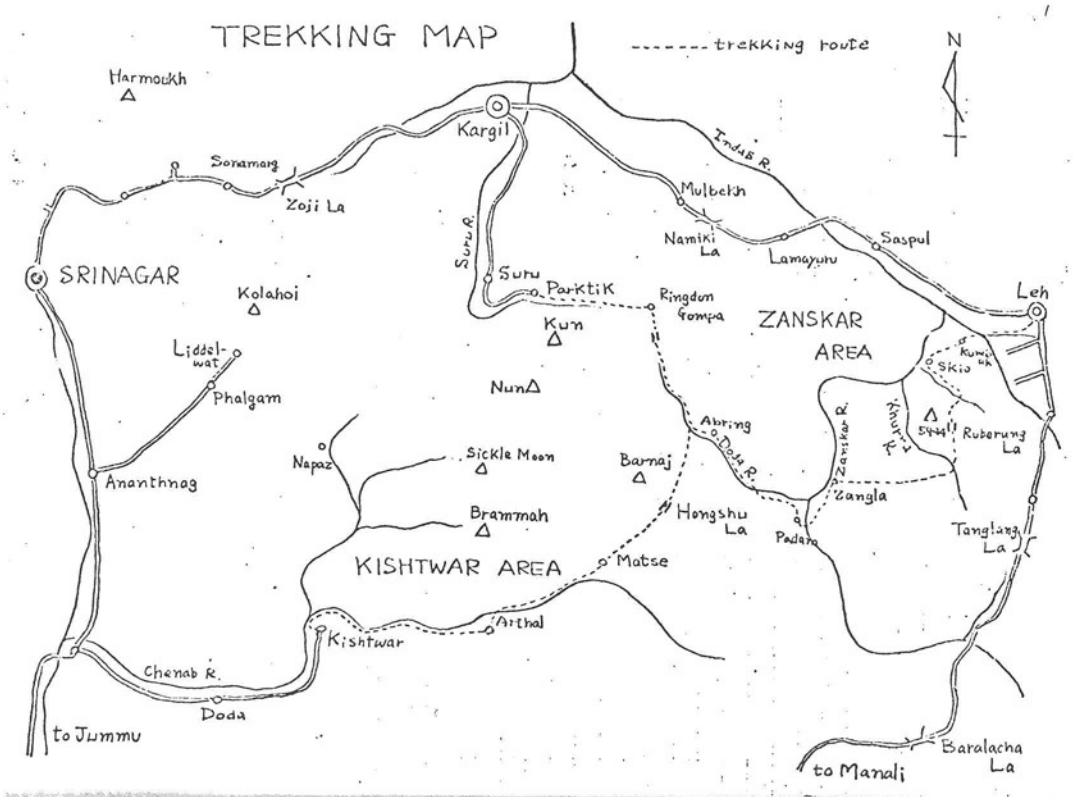
ラダックから434㎞に及ぶ長い砂利道がスリナガルにつなげられ、その道は5月から10月まではオープンされたままになる。道路は最も美しい谷のいくつかを通り抜け、その地方の植物や景色が変わる地点である有名なソジ・ラ(Zoji La)(3,529 m)を越える。カシミールの青々とした緑からラダックの荒れ果てた岩だらけの風景に変わる。谷間の柔かで甘い空気の快い微風が、そこらの海抜になると砂嵐をひきおこす原因となる。空はたいてい澄んだ青色で、太陽は明るく輝いている。その高さでさえ昼間のうちは、がまんできないほどの暑さになり、夜になると凍るような寒さになる。

スリナガルからレーへは毎日バスが出ていて、スリナガルを朝8時に出発し、カルギルで一泊して翌日の夕方、レーに着く。個人の車だと、1日でレーに着くことができるが、たくさんの峠を越えるその旅は退屈このうえない。カルギルで1泊した後、バスは翌朝軍隊のトラックが道路を占領するのを避けるために、たいへん早く、午前4時には出発する。個人の乗り物を利用することは制限されていないので、旅に非常に役立つ。

レーの中やその周辺の交通機関については1日とか半日契約のジープやタクシーが利用でき、それに加えて全く快適とは言えないが、ローカルバスも利用できる。

現在、土木事業局の収容設備が主要な村々にあり、利用できる。

ラダックの中で目立った目標物は仏教の修道院かゴンパ(ラマ寺)である。あらゆる村に修道院があり、1人か2人のラマ教徒か修道士がいる。ゴンパはいなかに点在していて、最も人目をひく建物である。急な山腹とか山の中の深く奥まった所など、近づくのに困難な場所を選んである。ラダックは12の主なる修道院とおよそ5,000のラマ寺がある。最も有名な修道院はヘミス・ゴンパ(Hemis Gompa)である。それはラダックの中で1



◇◇第７回東日本ヒマラヤ研究会開催予告◇◇◇ 6月25日(土)～26日(日)・1泊2日・秋田市◇◇◇

メイン・テーマ「ヒマラヤとのかかわり」(山、人、本、氷河、蝶、仏教、旅、言語、組織論……)
詳細は追って知らせます／定員70名／参加費 8,000円／申込先

番大きい修道院で、ラサの修道院に最も近く、また重要な地位にある。それはレーからレー・マナリ道路に沿って40㎞離れた所にある。その修道院はおよそ海抜3,600 mの山奥に位置している。それはポプラの密林の中にあるため、遠くから眺めても全然目立たない。毎年のお祭りは6月にひらかれ、ラダック中の人がやってくる。お祭りはおめでたいことであり、人々は多彩な衣裳を身にまとい、特に婦人は宝石の装飾のしてあるものを身にまとって、お祭りの芝居などを見物する。踊り手達はグロテスクなお面をかぶり、神秘的な雰囲気の中で太鼓や他の楽器の曲に合わせて、手や足を奇妙な身ぶりで動かして踊る。

寺院の内は、片手にはすを持ち首飾りをした大きな黄金の仏像がある。また修道院の壁は神や修道士や聖者が美しく描かれている。めでたい時の祭式や儀式は念入りで実に色彩的である。香をたき、バターランプをともし、音楽を奏することは、ラダックの仏教徒の礼拝のほとんどすべての行事に欠くことのできない原則である。修道院の中は莫大なバターランプが1日中絶え間なくともり、楽団が堅苦しい礼拝がはじまると同時に演奏をはじめる。たくさんの旗をあげた人々の家は── 旗は災いが及ぶのを防ぐ力を持っていると信じられている── 祈りや礼拝と同じような雰囲気を再現する。

他に訪れる価値のあるのはティクセ(Tiksey)の修道院で、そこはインダス峡谷の景色を前方に見おろすことができる。それはヘミス・ゴンパへ行く途中の丘の斜面に突き出て建っている。修道院は彫像や仏舎利塔(ストゥーパ)やタンカ(仏画)でいっぱいの部屋がたくさんあり、非常に興味深い絵画もある。

シェイ(Shey)の宮殿と修道院はレーからおよそ15㎞、ヘミスへ行く途中に建っている。宮殿は丘の頂上にあり、表面が金色の大きなストゥーパが置かれている。シェイの修道院にある座った姿勢の仏像が、一番背の高いものだと信じられている。その仏像は銅と金めっきでできており、2階建ての高さはあるが、1階ぐらいの高さに登っただけで、仏像の顔を見ることができる。また修道院には音が美しく聞こえるために、風でよく鳴る鈴がある。

一番簡単に行けて一番よく保存されている修道院はスピトック(Spituk)にあり、スリナガル・レー道路の途中でレーの3㎞手前にある。それは小山の頂上に建てられ、インダス川を見おろしている。並んで建っている修道院のうちでは、古い方の1つである。ま新しいゴンパがここでもまた、修道院の中に建てられている。タンカの豊かな宝や、その他の美術品がよく保存されている。

その他に重要な修道院は、アルチ(Alchi)、ニインム(Nimaun)、センカール(Senkar)、フィアン(Fiang)、ラマユル(Lamayaru)、ムルベック(Mulbekh)、リイキール(Likir)にある。

ゴンパはアルチ、ラマユル、ヘミス、スピトック、レゾンの村はずれの崖の上に絵のように美しく建っている。全てのゴンパには、幼年時代に両親に送り込まれた修道僧がいる。たいていラマの帽子をかぶった少年や、チョモの帽子をかぶった少女を見る。ラマやチョモは一般の人々を支配する権力があり、それは牧師と信者というように、はっきりと分けられている。

ラマ教徒はきれいにヒゲをそり、所属する宗派の印として赤か黄色の帽子をかぶっている。ラダックの仏教はラマ教として一般に知られ、それはタントリマク・マハラヤ仏教の赤帽派であり、多彩な祭式や儀式によって、はっきりとした特色を示している。

ラダックの中の村を訪れるならば、チョルテンやマニ壁の長い通りを行くことになる。これらはいつも、人の家があることを一番はじめに示すものである。

チョルテンは信心深いラマ教徒の遺骨が納めてあり、泥で作られ、はでな色で塗られ、家の上の方にある塔のことである。マニは大きな壁か塀で、時々長さ1.5㎞、高さ2.4 mにも及び上部がまん中から片側へ傾いているものがある。屋根のほとんどの石に、一般的な祈りの言葉である「オム・マニ・パドメ・ホム」("Om Mani Padme Hum")と精巧に刻まれている。ここからマニ壁の名前が出た。

ラダックはトレッキングだけでなく登山にも広範囲にわたって開放される可能性がある。5,000～7,000 mの間の多数のピークがあり、それらのほとんどが名前を知られておらず、未登のものばかりである。スル(Sura)やザスカール(Zanskar)の谷は、特にそこにそびえ立つヌンとクンの対に

なった高い山頂を見ながら、興味ある旅行をすることができる。ザスカールの谷はカルギルから途中ペンジ・ラ（Penzi La）（4,400 m）を越えて、たった1週間ぐらいで行くことができる。ジープでしか通ることのできない道路が、スル川に沿って続いており、カルギルからランドン(Rane-Doom)ゴンパまでおよそ130 kmの道のりである。

ヌン（7,135 m）とクン（7,077 m）の有名な双子峰はカルギルからおよそ60kmはなれたスル谷の中の、パルカチ（Parkachik）と呼ばれる場所からはっきりと見られる。これらの山の主な氷河へは、スル谷の数多くの場所から近づくことができる。北側から登るとすると、ベースキャンプはちょうど道路の近くに設営することができ、そのためヌンはスリナガルからわずかな時間で近づくことができる。

その他、興味深い旅行先は以下の地域である。

1. Leh－Kargil経由Suru Valley
2. Kargil－Suru－Zanskar－Kishtwar－Manali
3. Leh－Zanskar－Kistwar－Manali
4. Kargil－Suru－Kishtwar－Pahalgam

ヒマラヤ地方への旅行はもう始っている。インド航空は最近、これらの魅力ある谷々へ旅行を促進するための手段や方法を討議するために、1日中ゼミナールをひらいている。インド航空のマネージング・ディレクターのK.K. Uuni氏の就任のスピーチにおいて、「政府は外国人がヒマラヤを訪れるための制限を和らげることにともない、新しい一章が開かれた。幾年も幾年もヒマラヤは外国人の頭の中にはなかったし、オープンされた地域でさえも、どんなに宣伝しても人気がなかった。美しい景色を楽しむにしろ、トレッキングに行くにしろ、その地域の植物群や動物群を探検するにしろ、単に世界中で最も高い山々をひと目見るにしろどんなものでも、将来旅行者が興味を抱く可能性がヒマラヤにはある。このような旅行者のためのインドへの交通は莫大な可能性を秘めており、それによって我々の利益もどんどん開拓されていくだろう」と彼は述べた。　（河合佐多子 訳）

新刊紹介　1976年ナンダデビィ偵察報告 1,500円(送別)

研究Ⅰ（手続書）に続いて労山の出したインドヒマラヤ研究Ⅱで情報がいっぱい。

（HAJにⅠ、Ⅱとも在庫有）

── 講演と映画の会 ── 予告 ──

「ヒマラヤのかなたへ」

インド航空のトレッキング・登山関係を担当しているJ・シン中佐（コーリ大佐の後任）をHAJから招待し、インド・ヒマラヤの講演会を開きます。そして、これを機会にヒマラヤ研究家、水野勉氏の講演もお願いし、下記のような日程（案）で講演と映画の会を開催します。詳細については追ってお知らせしますが、下記の地区以外でも、集会や研究会を開いて欲しいというご希望をお持ちの方は3月15日までにHAJ名古屋事務所へご連絡下さい。

主な内容

講演「**インド・ヒマラヤの魅力**」　J.シン氏
（資料配布・通訳つき）
講演「**シルクロードの山と人**」　水野勉氏
映画　シルクロードまたはヒマラヤの映画
（予定）

入場料当日　800円　前売500円（予定）

日程

Ⓐ
- 7月24日(日)　名古屋　15時00～17時00
- 7月25日(月)　宇都宮　18時30～20時00
- 7月26日(火)　郡山　〃
- 7月27日(水)　八戸　〃
- 8月3日(水)　東京　〃

Ⓑ
- 7月29日～　7月30日北海道アポイ岳登山
  （エリモ岬の近くの高山植物の美しい山）
  または十勝岳登山（子供、老人でも楽です）
- 7月31日(日)　帯広、旭川などで小集会
- 8月1日(月)　札幌　18時30～20時00

なお、上記の日程に合せて下記のフェリーによる「**洋上ヒマラヤセミナー**」を開きます。

Ⓒ
- 7月28日八戸港発22時00→苫小牧着09時30
  （東日本フェリー）
- 7月26日名古屋港発18時30→仙台着27日18時00
  →苫小牧着28日10時45
  （大平洋沿岸フェリー）

合流

Ⓑと©を組合せた北海道の山旅とヒマラヤ洋上セミナー（札幌で解散）に関する費用は実費をいただきます。フェリー、宿泊などの手配は事務局でおこないます。これに参加希望の方は4月末日までにHAJ名古屋事務所へお問合せ下さい。

カラコルムの山旅 (4)

河西俊郎

1974年6月から9月まで静岡登攀クラブのメンバーと一緒にビアソォ氷河にあるバインタ・ブラックを目指したときの記録である。

7月7日

今日はアスコーレ目指して出発した。テント場の使用料として5ルピー(約150円)支払った。村から小1時間程して野天風呂があり、早速4人のポーターが入浴としゃれこんだ。最後尾を行く私にとってこれは冗談ごとではない。すぐ出発するように言うが、サーブも入れといって全く相手にしない。キャラバンが始まって以来、私はポーターとよく話をしたし彼等とは相当親しくなっていたこともあって、そのつもりでいるらしい。ついにチケットをチェックすることにするといったら、あわてて仕度をした。

しばらくして村に入る。何という村かは知らないが割合ひとなつこく、女性も平気で写真を撮らせてくれた。この村を出てアスコーレに向かう。畑の畔にウメバチソウやエーデルワイスが咲いている。ウメバチソウは日本のものより、やや葉が長めであった。何となく懐かしい花の香であった。こうしてブラルド谷で一番緑豊かなアスコーレに着いた。ここでデュッソーからアスコーレ迄の賃金の支払いをした。パキスタンでは札を糸で通して止めたり、ホッチキスで止めてあるので、面倒なことが起った。先ず、札の古いものの取り替、穴のあいたものの取替など、全く頭のシンが痛くなるようであった。次にポーターの雇用であったが、アスコーレの人間にいわせると、氷河はデュッソーの人間では無理だというし、デュッソーのポーターは、我々がここまで荷を運んできた云々で、なかなか折合がつかず、リエゾンがとうとう棒をふり上げる仕末であった。どうもここの人間は良くないようだ。先ずS隊員がくつ下を洗って、自分の枕元の木の枝にかけておいたのが、ちょっとうたた寝している間に無くなってしまった。今夜は気をつけないといけないような気がする。

アスコーレ

飲み水さえ無い、あまり印象の良い村ではなかった。年寄りも悪知恵ばかりが働らくようで、うわさに聞いてはきたが、手がつけられなかった。村のハジ・サーブが何かといろいろ気をまわしていたが、どうも、ひと悶着おきそうな村であった。ここでリエゾンが荷物を30kgから23kgにしろといい出した。理由は、氷河は危険だからということであった。今更、再パッキングとは。しかも、明日出発するのに時刻は午後6時。彼の判断でそうするということなので、日当を余計に出すからといったが、全然だめであった。当然、隊員の感情も悪くなったが、とにかくB・Cへ荷を運ぶために、我まんしようということで、暗くなるまで、再梱包のしなおしであった。

7月8日

昨夜下隊員は荷を心配して外へ寝たが、枕元から1mとは離れていない場所へ置いた"ギイ"(粗製バター)が無くなっていた。まるで忍者のようであった。集まったポーターや村人の話では犬が食べたのだそうだ。それを自分達のせいにするのはけしからんと言って、荷をそのままにして帰ってしまった。

早朝から、わいわい騒がれて、いささかまいっていた我々にとって、これ幸いとパッキングを済ませてしまった。どうせ彼等が、荷を運ぶ気がないことなど、もうとうないことは、土塀ごしに、チラホラこちらを見ていることで察しがついていたので気は楽であったし、いざとなれば、デュッソーのポーターは、遠慮がちに遠くにいたので何とかなると思っていた。やがて彼等はチラホラと遠目ごしに集まって誰彼となく荷を受け取り始めると、もう先程のいきおいはどこへやら、まるで蜂の巣をつついたようであった。ポーターの仕事は何といっても、唯一の現金収入のチャンスであったから。

そういえば、マンゴ・グソールを目指したカナディアン合同隊は、ポーターとのトラブルで1日無駄な滞在をよぎなくされたということで、我々の隊はまあまあラッキーな方であろう。昼少し前頃、外国隊が対岸の山の斜面に見えるといった。彼等の目はよく見えることは確かである。

キャラバン中、テルクシュという形のよい山がいつもよく見えて、その眺めは見事であった。ただ、ブラルド谷の河の濁りは何ともいただけないが、この水の色はおそらく永久的に変わりはしないであろう。午後、待望のビアフォ氷河に入った。久々に飲んだ水らしい水。濁ってはいるがブラルド谷ほどではない。歯のしんまでしみた冷たい水を思いきり飲んだ。しばらく歩くと、我々の目指すバインター・ブラックが見えた。写真で見た独特の形をしていたが、皆自信を持ってあれがそうだといい切れなかった。今日は夕暮れまで歩いて、幕営地ナムラに着いた。

夜、リエゾンが私達のテントへ来た。彼の話だとこの辺の人は、ほとんどが小作人で現金収入はなく、まして結婚なんて夢のようなことだそうだ。娘をもらうには3,000ルピー(約10万円)必要であり、ある村では独身男性170人に対して、独身女性27人しかいないといった。だから、彼等がポーターになることに必死であることや、得た金を大切にしまっておくことが、だんだん理解できてきた。小作人は普通、食べるだけの穫物を地主からもらって生活しているのだという。

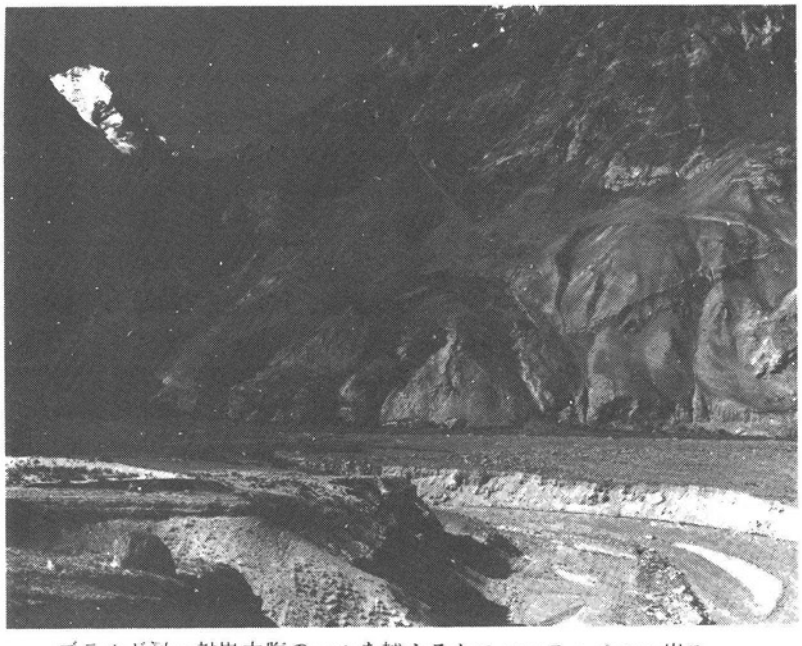
7月9日

今朝、池に氷がはった。例によって朝はさわがしい。1日に3～4人のポーターが解雇され、それがおさまるまで、かれこれ2時間はかかる。やっと出発。リエゾンは、地図を我々に渡さないので、どの位置を歩いているのか解からない。白い氷河へ出たが大きなクレバスがあちこちにあって行手をさえぎる。ポーター達は、裸足になってしまった。これが一番安全だという。バインター・ブラックが見えはじめ、が近くに見えてなかなか遠い。氷河の幅が4㎞もあるというのだが、物の比較が解からなくなってしまった。

ポーターは毎日、2度は大休止をとる。今日も歩き良い氷河から、例によってモレーン地帯へ入り、坂を登ると平らな、川の流れている景色の良い所で休んだ。彼等はさっそく水浴をしたり、すぐその上で用便をしたり、私達はそれを知らずに川下で、これはうまい水とばかりに、たらふく飲んでしまった。彼等はここでナベ、カマを出して"オロン"というネギに似た植物を煮ているのだ。においが強くて、とても食べられなかったが、何でも精力剤だということである。再び氷河に入りモレーンを越えて、夕陽の傾く頃、ソブロンに着いた。今迄のキャラバン中で、一番美しく静かな心のなごむ場所であった。一面に咲く白い花。水をたたえた池。ポーターの騒ぎ声さえ我まんできれば、申し分のない幕営地である。

リエゾンのハプニング

夕げの一刻。一人のポーターが1つの大岩に登り始めた。年寄りのポーター達は顔色を変えて(?)(といっても黒い顔なので解からないが、声色でわかる)とめた。彼は登るのをやめた。今度はポーター連中が、我々やリエゾンに登ってみろと面白がってはやし立てた。大事の前の小事の相手になっていられない。ところが若いリエゾンは止めるのも聞かずに登り始め、運悪く途中から滑り落ちて、足を捻挫してしまった。先ほどはあのくらいはやし立てた連中が、今度はいとも心配そうな顔をして集まってきた。すぐに手当をしたが、相当に痛そうであった。



ブラルド河・対岸中腹のコルを越えるとスコロラ・パスへ出る

ヒマラヤ閑話11

◇◇◇◇◇◇「深田久弥旧蔵書目録」のこと◇◇◇◇◇◇

水野　勉

昨年（1976年）11月に、国立国会図書館において「山の文献展示会」が開かれた。内容は主として江戸時代から近代登山がはじまるまでのものであり、「日本風景論」で終っていた。内容からいっても珍らしいものが多く、たいへん充実した内容であった。その際、特に関係はないのであるが、折角入手したものであるからということで、九山山房の蔵書だったもの、すなわち深田久弥氏の旧蔵書の一部を展示してはどうかという話になり、ぼくも相談を受け、リストを作り、ごく一部を展示した。その際、中央アジア関係は省いて、ヒマラヤの古典ということでまとめた。その中には、ぼく自身はじめてみるものもあって、このお手伝いも楽しかった。

さらに、どうせ展示するなら、九山山房の所蔵目録を作成しようということになり、関係者の努力で目録ができあがった。「深田久弥旧蔵書目録」というのがそれである。ご存知のとおり、九山山房の旧蔵書は洋書については、すべてそのままそっくり国立国会図書館が所蔵することになり、散逸することなく、われわれが目にすることができるようになったのである。しかし、図書館の中に、九山文庫とか九山山房とかとまとめて所蔵されるわけではなく、各分野別にそれぞれ所定の場所に区分されて置かれ、図書館の中では散在することになったわけである。そのような不便を一挙に解決したのが、この「目録」である。

ざっと紹介すると、目録は、各項目別に区分されて、ＡＢＣ順に並べられ、解説はないが、目録としては完全な記載となっている。すなわち、簡単な表題だけの記載に終ることなく、詳しく記載されていて、最後に国会図書館の所属番号が記入されているから、この番号で窓口へ出せば、すぐみたい本が出てくる仕組になっている。最後には索引もついていて便利である。項目は、歴史・地理、民族学、登山、紀行一般、伝記、宗教、芸術、語学・文学、カーマ・ストラ、その他、雑誌、などとなっており、それ以外は地方別、例えば、日本、アジア、中国、チベット、蒙古、ヒマラヤ、カラコルム、中央アジアといったふうである。

とにかく、専門家の手になった目録だけにりっぱな出来である。ヒマラヤ関係では、先に薬師義美氏のすぐれた目録ができているが、あれは九山山房の蔵書を主体として作成されたと聞いているし、それに追加され、短かい解説もついていて、まことに便利なものであるが、今度の目録は、深田久弥という個性に貫かれた蔵書の目録であるので、あたたかみが感じられる。表紙には、「九山山房」というかっての蔵書印が朱で印刷され、巻頭には、九山山房の額と深田氏の肖像が写真として載っているし、最後には、深田久弥略年譜が掲げてある。さらに、深田氏の友人であり、その良き理解者であった望月達夫氏の「九山山房書について」というまえがきがついている。この文庫は望月氏の深田氏に対するあたたかい友情が感じられる文章で、簡単な文章ながら、九山山房書の内容を要領良く紹介している。

たしかに、この目録には、深田久弥という個人の性格と生活がにじみ出ているのである。いくらかでも深田氏と接した人なら、それを強く感じられるにちがいない。

ただ、この目録をよくみてみると、あるべきはずの本がないことに気がつく。どうしたことであろうか。氏がその文章の中で所蔵していると書いている本が何冊か無いのである。もっとおかしいのは、ぼくはその蔵書印の押してある本を所蔵しており、それが目録にはないのである。古典として有名な本であるから、不要として片付けたはずがないのである。

また、ドイツ語系統のヒマラヤ本が少し不足しているようであるし、イタリア語関係は大分これに加える必要がある。ヒマラヤをはなれて中央アジアとなると、やはりロシア語の文献が不足である。ロシア語文献はまことに稀購本であるので、収集もたいへんでむずかしかったのだと思う。中央アジア関係はこれからということだったと思われる。まことに深田氏の早逝が惜しまれるゆえんである。

（52年度（52.4〜53.8）年会費を納入して下さい。今年度に限り名簿代などを含み5,000円です。）

＜中央アジア紀行＞

ブハラの秋

水野治朗

ブハラの秋は、みのりの秋！

ブハラ空港からホテルまでの道の両側は、土塀と平屋根の住居が続き、はるばる旧ブハラ汗国の都ブハラに着いて、その感銘が深い。道の両側にはこの秋に収穫された棉花が、雨のないためか、うづ高く野積みされていた。秋のブハラの空は、ペルシャンブルーに高くすんでおり、その下でブドウ・スイカ・メロン・リンゴなどが実っていた。

しかし、秋とは云え、朝10時を過ぎると、30度をこす猛暑となるが、湿度が低いので、日陰は涼しく、そこで熱いお茶を飲んだ心持よさは忘れることが出来ない。

× × ×

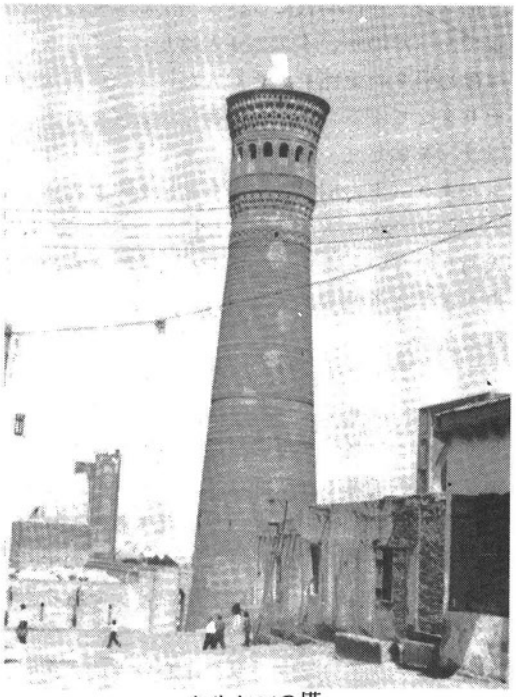
ブハラは、1507年よりブハラ汗国の首都となり、1920年まで続いた。旧市街の模様は、ブハラ汗国当時そのまゝに伝えられており、最盛期には、イスラム教のモスク（寺院）360、隊商のサライ（宿舎）62もあったと伝えられている。

現在のブハラの都市計画では、新市街（ロシヤ人街）は旧市街（イスラム街）より離れて建築されており、シルクロードのオアシスとしての旧市街の保存状態はよい。

ブハラの象徴は、なんといってもカリヤンの塔である。ペルシャンブルーの空に土色のカリヤンの塔が、つきさゝっているのは、帰国しても強く私の印象に残っている。ブハラ市街の裏街では、どこからでも、このカリヤンの塔が見える。この塔のあるところがブハラの中心広場であり、この塔を中心にしてモスクやメドレセ（イスラム教の学校）が配置されている。住居街では、日乾の煉瓦と泥だけで造られた平屋根の家が、びっしりと、ほとんどすきまなく立並んでおり、薄い水色に塗られた長い壁でかこまれており、思い出した様に小窓をあけている。壁と壁の間の細い道を、すり抜けるようにたどっていくと、赤・青・黄などの原色の巾広いたてじま模様のウズベク衣裳に身をつゝんだ娘さんにすれちがうこともある。ロバにひかれた馬車が、ゆっくり走ってくるのに会うこともある。自動車が車幅一杯の道を、通行人に遠慮しながら走ってくるのに会うこともある。赤いネクタイをしめたピオネールの美しい少女もみかけたが、じきにカリヤンの塔の見える裏街の土の壁の中に消えていった。

裏街の道は、縦横に、あみの目の様に走っているから、まさに迷路そのものと云ってもよい。その迷路を、まわりくねってゆくと、崩れたモスクやメドレセにつきあたることが多い。これらのモスクやメドレセは、青金石やトルコ石をすって描いた様に、見事な見事な青いタイル文様で飾られている。

カリヤンの塔の東側は、商業区になっている。この地区には、大きな煉瓦造りの丸屋根の集っているターク（天蓋市場）が3つあって商業区の中心になっている。シルクロードには、オアシスを中心として、物資交換の市場があったが、ブハラには、その最大の市場があったものと思われる。この丸通根のタークは、道路の交叉点に立っている。砂漠を、何日もかゝって旅してきた隊商は、水と食物の得られるブハラに到着して、自分もラクダも休息したものと思われる。そして砂漠の暑



カリヤンの塔

気を防いで、商取引をするために、丸屋根の市場がつくられたのであろう。現在ブハラの中央を南北に走るフルンゼ通りに、宝石のターク、帽子のターク、両替のタークが、この通りと東西の3つの大通りが交叉する十字点を、おおって造られている。丸屋根の下では、道路が十字またはY字に交叉している。旧い時代ではラクダが歩いたタークの丸屋根の下を、現在では自動車が走っている。若干の商店が薄暗い下で店を開いている。中は、ひんやりとして、暗く、疲れをいやす様な気がする。

その他、旅人やラクダのためのサライ（宿舎）があり、大きな丸屋根や小さな丸屋根が集ってタークより大きな土色の四角い建物をつくっている。またハウズ（用水）が3カ所あり、現在その内2カ所は、水をたたえておって、その附近には樹林があって、樹下にはチャイハナ（茶店）があって、住民たちの集会所となり、あついお茶をすゝりながら住民は談合していた。

ネパールのカトマンズやバドガオンの裏街は、木彫で飾られ、暗く芸術的な落ちつきをみせているが、土で造ったブハラの裏街は、単調である。しかし、ネパールの街のような不潔さはなく、非常に清潔であった。

旧ブハラ汗国時代には、夕刻7時以降は外出禁止であったのか、夕刻には人通りは少くなり、道は勤め帰りの家路をいそぐ人だけで、裏街はひっそりとしてくる。そんな裏街を歩いていると、コーランを唱えている声が、道まできこえてきて、シルクロードの旧い都だなあと、しみじみ感じた。

ブハラの夜はネオンはなく、僅かな街灯だけで、人通りのない死んだ街となる。ときどき犬の鳴き声がきこえる位であって自動車も走らない砂漠の町となる。

× × ×

ブハラには観光の対象となるものが多い。

- カリヤンの塔　高さ63mの日乾の煉瓦で造られた古塔である。表面はイスラム模様でうめられている。この塔は、イスラム教の礼拝の時間を知らせる他、光塔として、夜は火をたいて、砂漠をゆく隊商にブハラの街の所在を知らせたものであった。
- 内城（アルク）　ブハラの中心は内城であり、高さ20mの丘の上にあり、旧ブハラ汗国王の居城であった。現在は博物館となっている。
- イスマイル・サマン廟　アラブ以前のソグド建築の伝統をつぐ芸術的香りの高い建物である。簡素優美な形式は他に例をみない。
- 夏の離宮　郊外のマハサに、ブハラ汗国王の夏の離宮がある。ハーレムの跡があって、美女の入浴に利用したプールも現存している。

旧市街には、多くのモスク・ターク・メドレセ・サライ・ハウズ・チャイハナがあり、旧市街全体が観光の対象となっていると云ってもよい。

× × ×

ブハラの住民は、サマルカンド同様、その大部分はウズベク人である。中年以上の住民は、ウズベク風であるが、若い人達は、男女共に、現代風である。

当地方は、イスラム圏であったので、過去には一夫で四妻まで持ち得たが、現在ソ連の法律では重婚を禁止している。

ソ連には、インフレがないので、住民の生活は安定しており、治安も非常に良かった。もう一度行ってみたいと思っている。

HAJの新刊予告

◇◇◇中央アジア・シルクロード◇◇◇

主な内容　（4月末発行予定　予価1,600円）

序文、金子民雄（中央アジア研究家）

ソ連領中央アジア

天山の麓、アルマアタの街、パミールの山

中国領中央アジア

チベット自治区（地形、気候、主要都市）

新疆自治区（主要都市、山々）

ハミ――カシュガル間自動車ルート

中央アジアをめぐる

ラダック、パキスタンの山旅、7ハン、イランの山、トルコの山

現代のシルクロード、アジア・ハイウェイ

トルコ、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インドの道路状況と車の旅

アジア・ハイウェイバス料金表

などなど、各地の歴史地理的解説に実用的なガイドを加えた。中国奥地を除いては、すべて10名余の執筆者の最近の実地調査や資料によっている。

文献、写真、図版も多く、読んで分りよく楽しい本になっている。（B6版　約160頁）

（HAJ会員用特別価、送共1,400円　申込〆切5月末）

＜中央アジア・ガイド＞

中国領中央アジア

沖　允人

＜まえがき＞

ヒマラヤ、天山、コンロンの山々に囲まれたチベットや新疆に関する情報はなかなか得られないのが現状であるが、中国の出版している「人民中国」にときどきこのあたりのルポルタージュ記事が載ることがある。以下は最近の「人民中国」1976年３月号の記事などから最近の中国領中央アジアについてまとめてみた。

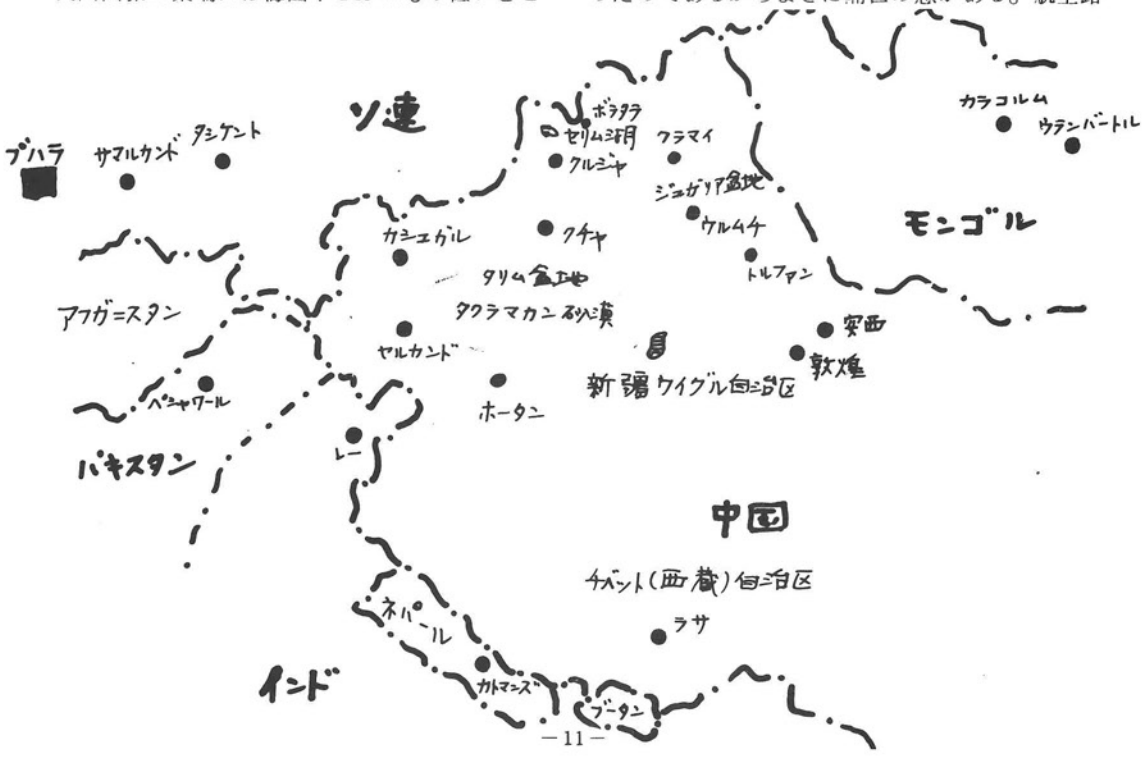
＜新疆ウィグル＞

新疆ウィグル自治区は1955年10月１日に誕生した中国全土の約⅙をしめている。中国の中で一番面積が広い自治区である。中央には広大なタクラマカン砂漠があり、南はコンロン山脈でチベット自治地区と接している。また、中央には天山山脈が走っている。こう書いてくると山と砂漠の国のような感じがするが実はそうではなく、天山山脈の北にあるジュンガリア盆地のまわりは広大な草原と原始林があり、その草原は優良なイリ馬の牧場となっている。

天山山脈の東端には海面下145 *m*もの低いところのあるトルファン盆地がある。ここは中国でもっとも低い地方である。これはカラコルム山脈の続きにあり、高い山と低い盆地とは実に対象的である。そして、トルファンは昔は「火州」と呼ばれていたように夏は大変暑く、47.6度という記録もあるほどで、西遊記に出てくる赤い色をした火焔山も実際にある。民族も、漢族、ウイグル族に次いでガザフ族、キルギス族、タジック族、ウズベック族などいわゆる中央アジアの民族が入りまじって住んでいる。トルファン盆地は風も強く３月から９月にはかなりの強風がある。「風車（フォンクー）」と呼ばれるゆえんである。印章、貨幣、古書、錦織などを集めた新疆ウィグル自治区博物館でこれら多様で古い歴史の地を理解させてくれる。

＜北京から３時間＞

ウルムチへは航空路が開かれていて、北京からの3000Kmを僅か３時間10分ほどで到着する。かつてのシルクロード時代には１カ月も２カ月もかかったのであるからまさに驚世の感がある。航空路



は北京だけでなく、10数の都市に週40便あまりがとんでいる。鉄道は1950年に建設がはじめられ、甘粛省の省都である蘭州からウルムチまで1892Kmが1962年に完成した。道路もかなり発達し、たいていの街には自動車で行くことができる。その道はインド北西部にも通じている。

ウルムチの東にはボグダ峰5455mが万年雪をたたえており、近代化した街を囲むように草原があたりにひろがっている。

蒙古語〃美しい牧場〃という意味のウルムチは今でもその言葉通りよくこの街を表わしているといえよう。化学肥料の工場も郊外にある。カシュガル市、クルジャ市などもすっかり工業都市にかわってしまっている。ウルムチから西北方に車で3時間走ったゴビ砂漠には1950年に建設されたマイターグ製油所がある。ここの石油はさらに150Kmほどはなれたクラマイ油田からとれる。

＜牧草地セリム湖＞

果てしなく続く草原を走って行くとセリム湖に出る。グルシャ市の北にあるこのセリム湖まではウルムチからボラタラ市で一泊して車で行ける。ここはイリ・カザフ自治州である。どこまでも平担にひろがる草原の中にセリム湖はある。標高は2100mほどある。湖を馬でひとまわりしても2日かかるという。

住民はパオですごし、ラクダの乳や羊の肉入りうどんを食べている。ときにはラワップ、ドトール、ドンブラなどの民族楽器をかなでて中央アジアの歌をうたうこともある。

これら中国領、中央アジアとソ連領中央アジアそして、パキスタン、インド北部ラダックの地域は軍事的な意味で各国とも大切なところである。そのためにあまり人も住んでいない。これらの地、〃世界の屋根〃には雄大な軍用道路が建設されている。詳しくは、「ヒマラヤ」41号に紹介記事があるのでそれをみてもらうとしてここでは図だけをかかげておく、いずれにしても、もし、この〃世界の尾根〃に平和がおとずれたらこれら軍用道路を使ってのドライブが可能である。

＊＊＊＊＊ 中国の行政区画 ＊＊＊＊＊

中国（中華人民共和国）は22の省、5つの自治区と3つの直轄市（北京、天津、上海）からなっている。人口は約7億7千万人である。

ヒマラヤやチベットが入っているところは、北の新疆ウイグル自治区（ウイグルは維吾爾と書く）であり、ウルムチ（烏魯木斉）が省都である。モンゴルに接しているとこは内蒙古自治区でフホホトが省都で人口は約1千万人で新疆ウイグル自治区よりも100万人ほど多い。

旧満州は黒竜江省となり、省部はハルピン（吟爾浜）である。かつてのハルピンは姿を消し、今は電気機械工場などのある工業都市となっている。

黒竜江省と新疆ウイグル自治区の間に寧回族自治区（省都、銀川）がある。そして、その西が、甘粛省（省部、蘭州）、そして、タクラマカン砂漠のある青海省（西寧が省都）と続く。

青海省の南がチベット高原から大ヒマラヤの北に広がる西蔵自治区であり、省部はラサである。人口は150万人と少ないが、ポタラ宮殿の前には高等学校もでき、バスケット・ボールなどを楽しんだり、近代農業が広がっている。しかし、ラマ寺院は今でもラマ僧によって大事につがれている。

さらに南東の地域が雲南省で、主都は昆明である。この省は8番目に面積も大きく、人口も2,400万人と多い。

これらの行政区画は各省にある委員会の代表によって国務院（政府）につながっている。これをサポートするかのように地方各級革命委員会がある。そして住民は民兵という形で人民解放軍へつながっている。いったん〃コト〃がおこればこれら国境に接する地域は重大な役目を負うことになるので、国境警備隊などにも力を入れている。

＊＊＊＊＊ 中国々内の交通 ＊＊＊＊＊

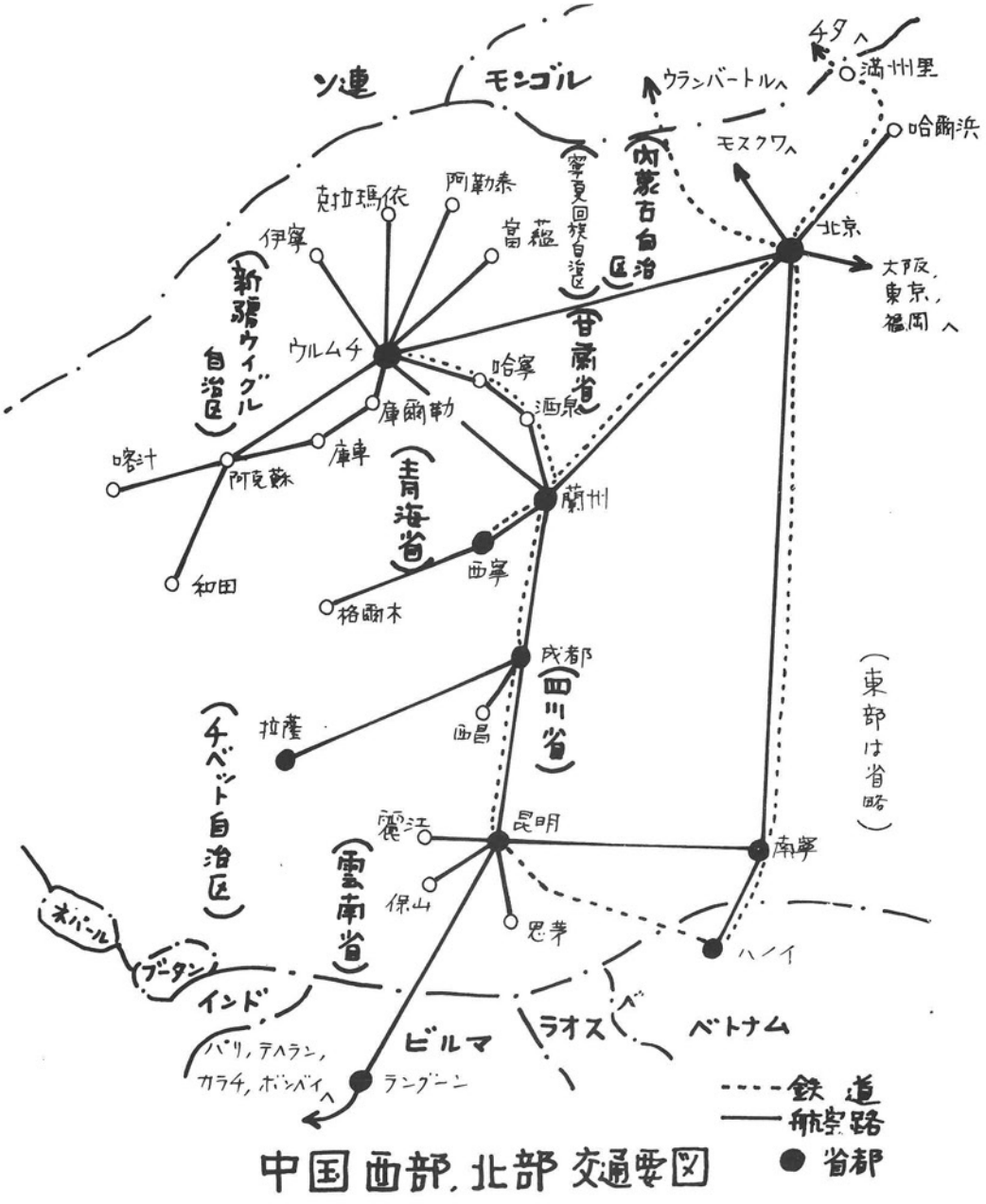
中国々内は中国民用航空（Civil Aviation Administration of China＝CAAC）が各都市を結んでいる。国内線の無料手荷物が1人15kgとなっている。プロペラ機が多いが、航路によってはジェット機も飛んでいる。

北京からウルムチへ、そこから各地へのルートがある。南の方では昆明を中心にひろがっている。ラサへは成都から航路が開けている。なお、昆明からはラングーンに国際線がとんでいるので、ラングーン市内で中国人パイロットや航空会社の人を見かけることも多い。北京からは東京、モスク

ワ、カラチ、テヘラン、福岡、大阪などへJAL、中国民用航空、エア・フランス、パキスタン航空、イラン航空、BOAC、スイス航空、カナダ大平洋航空などが乗り入れている。

汽車もウルムチ、ハミ、蘭州、成都、昆明などに通じている。昆明からはハノイへ、ソ連からはモンゴルのウランバートルへも国際列車が走っている。

道路はほとんどの街に通じているといってもよいくらいで、軍用目的にあってよく整備されている。HAJが1980年にむかって計画しつつあるヒマラヤとシルクロード1周大作戦もこれらの道路を使う予定である。その夢のような計画が実現することを祈ってこの小文を終ることにする。



中国西部,北部交通要図

＊＊＊＊中国旅行のアドバイス＊＊＊＊

現在中国への旅はすべて日中旅行社などを通して中国からの招待という形をとっている。個人的な旅行は許可にならない。目的、日程、メンバー表などをそろえて中国旅行を扱っている日本交通交社などの旅行社に問合せられたい。

＊＊＊＊＊＊＊ 文　献 ＊＊＊＊＊＊＊

「人民中国」
人民中国雑誌社　1976年3月号　120円
発売所　東方書店　東京都千代田区神保町1－3
「ソビエト――ことばと文化の旅」
1974年6月20日
日ソツーリストビューロー著　三省堂　1,400円
「ソビエトの旅」
実業の日本社　1970年4月15日　490円
日本航空㈱編　ブルーガイドブック
「今日のチベット」
外文出版社（北京）　1972年
発売所　東方書店　100円
「パミール遠征登山報告書」
1975年8月25日（非売品）
1974年レーニン峰
新潟大学山の会・大阪外国語大学山岳会パミール登山隊
「パミールーシルクロードの城塞」　2,500円
ベースボールマガジン社　1976年6月5日
田村俊介編著　山岳名著選集

読者だより

××××××××× 日本からヒマラヤから ×××××××××

スクラマン・礼子　12月30日　シムラ

主人も相変らずシムラのポテト研究所で研究を続けています。息子のアショークも毎日ホッペを赤くして遊んでおります。（後略）

山里　寿男　画伯　12月31日　カトマンズ

今日、HAJの年末トレッキングのグループはポカラへ出発します。モディコーラへむかいます。

菊地　仁様　1月1日　カトマンズ

カトマンズの街はポンコツ車が走り、路上では子供がめずらしい遊びをしたりしています。興味のつきない街です。カリカンダキからムクチナート方面へ入ります。

中村　好江様　1月7日　名古屋

HAJの年末ツアーで潟上さん、鈴木康志さん、折戸さん、森岡さんと一緒にゴラパニの峠まで行ってきました。みなさん、いい方ばかりで大変お世話になり、楽しい旅でした。

プンピルで目の前に広がるアンナプルナ、ダウラギリを中心とする山々、トレッキングの途中で少しづつ姿を変えて目にとび込んでくるアンナプルナ・サウスやマチャプチャレの美しい姿。一生忘れないと思います。ヒマラヤは大きくて遠いという実感です。かなり歩いたと思ってもまだまだ村があり、貧しくとも平和な人々の生活があります。ゴラパニまでは日本人を始め、各国のトレッカーが多いのには驚きました。

折戸　正明様　1月16日　名古屋

往路はフィダ君の奥さんとお子さんと一緒に、インド、ネパールへいきました。デリー空港ではフィダ君の「今日は赤ちゃん……」の場面がありました。フィダ君、そしてネパールのランジャン君には大変お世話になりました。

ネパールではパラジュの工業団地、パタンの工業団地なども見てきました。また、市内での小企業の調査もでき、実り多い旅でした。

白井　敏治様　1月16日　茅ヶ崎市

新年はエベレストのふもとで迎えました。12日間の短いトレッキングでしたが、ヒマラヤの山々を間近に望み、旅を楽しんできました。帰路カルカッタの空港でIACのR.チョウダ　さんに逢いおせ話になりました。チョウダリさんは沖さんやHAJのことをよく知っておられ、なつかしがっておられました。

伊藤　満様　1月12日　インドにて

ダージリンからサンダクプー方面にトレッキングに行ってきました。シッキムも容易に入域できるようになっています。ダージリンでは西郡氏と一緒にHMIのテンジン氏や校長のアグリワル氏と歓談しました。テンジン氏の話ですと1977年プレにインド隊がカンチ東南稜をトライする由です。

＜H＆Sのページ＞

コムニズム峰登頂

「松井は俺がみる。他の者は計画通りに頂上にむかう」

神崎忠男隊長はきっぱりといい切った。

松井宝一隊員は最終のコムニズム第5キャンプ（6,900 m）の300 mほど下で意識が朦朧とし、ほっておけば重大なことになりそうな状態であった。高度障害である。医療用の酸素は持参していない。誰れかが彼をベース・キャンプまでおろさねばならない。しかし、コムニズム峰はもうすぐに手に入るという状況にある。神崎隊長の苦悩はみんなも痛いほど分った。神崎隊長一人を残していいものだろうか。もし、自分が神崎隊長の立場だったら……。

8月2日、フォルタンベック氷河のベース・キャンプ（4,050 m）を出発した神崎隊長をリーダーとする11名のJACパミール登山隊コムニズム峰パーティは、急峻な岩尾根をルートにして第1キャンプ（5,000 m）へむかった。全隊員は初めての7,000 m峰、しかも、日本人が初めてのパミールで力いっぱい登ってみたいと張切っていた。

この尾根は順化のための登攀で、すでに2回も登っていて、知りつくしてはいたが、自然落石が多く、それに、先行する他パーティによる人工落石も加わり、全く恐怖のルートである。

すでにルート工作され、フィック・ロープがつけてはあるが、そのロープも、多人数が登り降りするため今にも切れそうなところもあり、あまり頼りにならず、とにかく、安全のためにはスピードをあげて登り切るよりほかに方法はない。

身の細るような気持で到達した第1キャンプには、小さな池があり、快適な泊り場であった。すくわれる思いがした。

8月3日

昨日にひきつづいて今日も快晴である。第1キャンプを出発し、岩壁の真下をトラバースし、急傾斜の雪壁を登ると、ついにプラトーに出た。ここまでくればまず安全である。あとは高度との戦いである。登り切ったところに第2キャンプ（5,800 m）を設営する。

8月4日

今日は第3キャンプ（6,000 m）へむかう日である。しかし、朝起きてみると雪が降っている。天気のよいパミールにしてはめずらしいことである。

日本の山なら当然、"沈澱"の声がかかるところだが、この国際パミールキャンプは入山から下山まで、一方的にソ連山岳連盟で決められていて、8月11日、10時までにベース・キャンプに帰着していなければならない。

まだ標高6,000 mまでしか登っていないので、あと、第4、第5キャンプを建設し、7,495 mの頂上に立つにはあと7日ではギリギリの日程となる。

とても停滞してはおれない。全員がそう思った。特攻隊といわれようが無謀といわれようが、とにかく登ることしかない。すでにレーニン峰でのトレーニングも含めて6,000 m台の順応は一応、獲得していると判断していた。これは、従来のヒマラヤ登山の常識では少し日程が短いが、何とか登れる状態と思えた。問題は6,000 mから上である。しかし、日数はない。やってみるだけである。

この日、視界のきかない広く長いプラトーを第3キャンプへむかって黙々と歩いた。

プラトーの右手の山からは雪崩が出る。といって左に寄りすぎるとクレバス地帯に入ってしまう。1週間分ほどの食料、装備一式を荷上なしで全部一度に運んでいるのだから、荷物の重さも相当なものである。

15 km先のプラトーは実に長かった。行けども行けども第3キャンプ予定地に達しなかった。宮下上島、前田の先発隊3名のトレールはとっくのむかしに消えてしまっている。

夕暮もせまるころ、やっとの思いで第3キャンプに着いた。少し天候が回復し、頂上がちらっと見えて、皆んなを喜ばせた。しかし、腹は空いたし、疲労も相当なものであった。

手持の食料は乏しい。追加の食料をヘリコプターで第3キャンプへ荷上げしてくれることになってはいたが、この天候では期待できず、腹が空いたからといってどんどん食べる訳にもゆかない。それに、食料が運ばれてきたとしてもソ連がすべ

て用意してくれたソ連の食料は、日本人の口に合わないので、喉を通るとは期待できないことである。

8月5日

今日も雪。それも昨日よりはひどい天候である。もちろん、ヘリコプターは飛んでこない。そうなれば、登ることはおろか、下りのために必要な食料も底をつくことになる。

隊員の気持は沈んだ。お昼近くになっても天候は良くならない。今日は停滞するしか方法がない。

しかし、登頂したい。ヘリコプターの荷上がこなかったから頂上をあきらめて下山するなんて、とても耐えられない。

神崎隊長は「登頂隊を池沼、隊員他4名とし、他は第3キャンプで停滞する」と決定した。登頂隊にはできるだけの食料を持たせることにしたが、それでも5人分はとても念出できず、4人分が最大限であった。7,495m の山に初めてのルートから登るのに食料が1人分足らないのだ。誰いうとなく"特攻隊"とこのパーティを呼んだ。

生命がけになるかもしれない。しかし、誰れしもその特攻隊員になりたい。必ず登ってくるからと仲間に送り出されてきた皆んなは例外なく、何とか頂上に立ちたいと思った。だが、隊の事情はそれを許さなかった。

8月5日

快晴。ヘリコプターがやってきた。

登れるぞ！　心の中で叫んだ。

投下された食料を集め、すぐに出発する。

疲れは回復していないが、とにかく頑張って第4キャンプに登る。傾斜の少しゆるい雪面を一歩一歩登る。6,000 m を越すとさすがに苦しい。いよいよ本格的な高度との戦いだ。

第4キャンプは雪の側面をけずって設営するがピッケルの一ふりさえも苦しい。

8月7日

この日、第5キャンプに入った。

そこで、松井隊員が倒れたのである。

彼のために、誰れかがキャンプへ残らなければならない。しかし、誰が残っていても、何の足しにもならない。神崎隊長にまかせることになった。

「お前はそんな冷い人間であっていいのか」

「今、頂上に立たねば、もうチャンスはないぞ」

みんなの心は千々に乱れた。

8月8日

9時、第5キャンプを出る。

すぐに雪の斜面を 100 m ほど下り、頂上からのびている雪壁に取りつく。傾斜は50度ほどあり、一気に 600 m を稼がねばならない。

呼吸はみだれ、頭はガンガンする。顔は快晴の太陽に照らされ、焼けるようだ。

そして3時間、とにかく登った。

稜線に出た。

40分ほど休み、不必要なものは全部ここへデポし、最後の雪稜にむかう。

一歩、一歩頂上が近づく。もう少しだ。8ミリカメラをまわす。息をとめてカメラをまわすと窒息しそうだ。それでもまわす。とにかく頂上だ。

15時。頂上からパミールの山々を眺めた。山と神崎隊長の顔がうかぶ。松井隊員は生きているだろうか……。

8月9日

全力をあげて松井隊員をおろさねばならない。しかし、登頂隊員のなかで、その余力を残していたものは僅かであった。ソ連隊の応援を求める。

松井隊員をテントですっぽりとくるみ、ザイルを何本も固定し、10名で、ゆるゆると下る。しかし、ともすればひきずられて、全員が落ちて行ってしまいそうになる。事実、そんなことが1度あって、一瞬ハッとさせられた。第3キャンプへやっとの思いで達し、翌、10日、第3キャンプから落石をよけながら22時ベース・キャンプへ着いた。

松井隊員は生きてベース・キャンプへ着いた。神崎隊長の雪焼けした顔が、ベース・キャンプの灯に浮き出ていた。あの、芸達者で、陽気で、表情豊かな顔ではなかった。　(O)

HAJ 新刊予告

◇◇◇◇ シェルパの履歴書 ◇◇◇◇

主な内容　（3月末発行予定　頒価 2,400円）

これまでHAJが出版したシェルパリスト第1版、第2版の内容を大幅に改訂し、最近の資料も盛り込んでまとめた。シェルパを知るには有用である。顔写真もできるだけ載せ、登山経験はもちろん、各隊による評価も加えられている。約200頁。

また、一部ではあるがインドのシェルパ（ハイポーター）についても100名近く載せてある。

（HAJ会員用特別価、送共2,000円。申込〆切4月末）

＊＊＊HAJ・アフガニスタン登山隊報告会開かる＊＊＊

1月21日（名古屋）、1月28日（東京）でHAJ集会の1つとして、1976年HAJの送り出した、アフガニスタン登山隊の公式報告会が開催された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この隊の推進役となった佐藤優隊員（マネージャー）の編集による8ミリ映画（270m、約1時間）を中心に多くの出席者のもとで会は進められた。

アフガニスタンの砂漠を行くキャラバン、バダクシャンの氷河と山、コー・イ・ブラの初登頂、食肉用に解体した山羊、などなどBGM付の解説はプロハダシの出来ばえと、拍手が鳴り止まなかった。

このところ、カラコルム・ブームとやらで、アフガニスタンの山を訪れる登山隊は少なくなっているが、HAJでは"みんなのヒマラヤ"をモットーにし、あらゆるヒマラヤやシルクロードへの可能性をもとに、ブームに左右されることなく、これからもヒマラヤ、中央アジア各地に隊を送り出したい。この隊ではすでに、写真を中心にした右のような報告書が出版された。

アフガニスタン登山隊（1976）報告書の発刊

「バダクシャンから ヌーリスタンへ」

1976年7～8月、HAJが派遣したアフガニスタン登山隊の報告書が刊行された。アフガニスタンの北奥の地、バダクシャンからヌーリスタンへぬけ、2つの山域での5,000mクラスの初登頂を含む登山活動、貴重な高山蝶の採集などのようすが単なる報告書ではなく、行動の全容の記録としてのせられている。B5版、160頁。

内容は、「登頂記」全日程をふくむ「アフガニスタン滞在記」、「蝶採集記」を柱に、現地からの通信6通の全文、隊派遣の経過、現地での渉外、各係（装備・輸送・食糧・医療・会計など）のユニークな報告などで構成されている。巻頭には行程の全図、めずらしい現地の「国内旅行許可書」があり、要所にキャラバンのコース略図、活動山域の概念図などがのせられている。定価 2,200円 送料200円。

全員特価 2,000円 送料共。（3月末日までに現金をそえてHAJ名古屋事務所へ申込んだ方に限る）

＜関係の機関・団体――その4＞

アジア経済研究所

アジアの経済についての研究と出版活動をしているところとしては、アジア経済研究所がよく知られている。

所長は鹿子木昇で、アジア各国の情報を精力的に　集し、分析し、出版している。

アジア各国の新聞雑誌もファイルされている。例えば、ネパールのRising Nepal、パキスタンのDawn、Business Recorder、インドのTimes of India、Economic Times、Statesman、Indian Recorder & Digest、People's Democracy、Commerceなどの主要新聞がある。

守備範囲は韓国、北朝鮮、モンゴル、中国、香港、北ベトナム、南ベトナム、タイ、東南アジア各国、インド、ネパール、パキスタン、スリランカ、ソ連あたりである。

スタッフも多く、特に動向分析部の現地調査員という制度があって、有能な人が、アップ・ツー・デートな情報をキャッチしている。

それらは定期刊行物（月刊）「アジアの動向」をはじめとし、「動向分析資料」シリーズとして、1976年3月までに88点が刊行されている。

なかでも高く評価されているのは「アジア動行年報」で1970年版から1976年版まで7冊が発行されている。毎年3月頃に発行される。1976年版は746ページ（B5版）という大冊である。（7,000円）。各国の政治、経済などが、分析され、また、毎月の動きが関係諸国も含めて詳報されていて貴重なものとなっている。

出版ばかりでなく、アジア各国の現状分析についてはレファレンス・サービスという、質問と解答のサービスをおこなっている。

（O）

インド通信(8)

1976年10月9日、ニューデリー

報告にはいる前に、あるインド人の役人から聞いた話を伝えておこう。

「いまだに外国人（日本人）の中にはインドの役人を腐敗の固まりみたいにいう人がいるが、そんなつもりで現在のインドの役所を訪ずれるとエライ目にあいますよ……」

「インドは腐敗の根を絶つことに決めた」といった看板をくっつけたバスが市内を走りまわっている。インディラ・ガンディーは「腐敗を追放せよ！」……といいたてている。私は以前のインドの役所の姿を知らないが、表面的には、公然とワイロをとったりする役人はたしかにいなくなった。そして、時間はかかるもののとにかく役人はこちらの依頼を処理してくれる。

反面、インドの中にも「あの許可担当の役人に晩メシをごちそうすれば次からは簡単さ」というのもいる。私はそれが本当なのかどうかはしらない。しかし、ワイロはワイロとして現在インドでははっきり処罰の対称になっている――もちろん外国人も――。

私はインドの変り方あるいは、変えられ方というものを決して全面的には容認しないが、我々の中にあるインドの全体像が十年一日のごとく変わらないというのは、それは我々の責任である。我々の意識もまた変っていかなければならない。

で、話をもとにもどすが、デリーに10日いたことになる。ほとんど役所めぐりと、州政府の出先機関を訪れるのにその10日をついやした。はっきりいって消耗した。暑い中、ニューデリーのあちこちにちらばっている役所を探して訪れ、役人に会うというのは、東京にいるときでさえそういう生活をしていないのだから、まして、インドにおいておや、だ。

それに私には、役人というのは生理的になんとなく受けつけないところがあって、そのうえあのインド人の威厳ある態度に圧倒されてしまって……、やっぱり疲れたのだろうか……。

目的は何かといえば、それはひとえにアルナーチャル・ナガランド・アッサムなどのインド東北部への入域の可能性をもとめて、だった。

行けるところには行き、会える人には会った。思わぬ人に会えたこともあって幸運だったかもしれない。が、それらはすべて、最後には「インド内務省」という許可発行権限を持つ役所に返ってきてしまうのだ。自分としてはインド内務省の外堀から埋めていこうと思い、州政府へのアプローチを試みたのだが、それは外堀を埋めるどころか、単に内務省のまわりをぐるぐる回っていることにしかならなかったのだ。そして、ついに"本丸攻撃"に移る前に、"ガソリン切れ"になってしまった。

州政府の出先はどこも親切だったが、まったくどうしようもないのはあの内務省で、ここはガンとして動かない。

「アルナーチャル」の「ア」の字でも出そうものなら、それが「アッサム」の「ア」なのか、「アルナーチャル」の「ア」なのか、確かめもせずに拒否をくらった。

しかし、私もころんでもタダではおきない。当然のこと洲政府と中央の往復のあいだにつかむものはつかんできたつもりだ。いつか内務省の壁もくずれるだろう。

新刊　～～～ **東海山岳　第4号**　**内容概要** ～～～　2月25日発行

(I)　記録・ラトック山群（1975年）　ラトック山群概説／登山行動概要／学術行動概要（地質・氷河）／カラコルム通信（原真）／遠征をふりかえって＜スカルドでの検討会＞

(II)　論文　ヒマラヤ・雪の記録（樋口敬二）／組織論再考（原真）／高所順化（ジーン・リボリア　東海支部訳）ネパール人との出会い（トニー・ハーゲン　大森梢訳）

(III)　紀行　カシミール・コラホイ紀行（督永進）パミール・コムニズム峰登頂日記（鶴田倍弘）パミール・コルジネフスカヤ登頂記（小川繁）

(IV)　東海支部この15年－1961～76ルーム・ノートなどから／対談・ルーム・ノートから見た東海支部（原真・沖允人）

(V)　東海支部年表

写真、図版多数。頒価2,500円（HAJに在庫有）

書評

「東海山岳　第４号」

日本山岳会東海支部が設立されてから今年で15年になる。その間に会報の東海山岳は1964年に第１号、翌年に第２号、その後10年を経た1975年に第３号が刊行されている。

本書は、その第４号に当たり、同支部の遠征記録や論文等が収録されている。

内容は５部に分かれており、第１部記録、第２部論文、第３部紀行、第４部東海支部この15年、第５部東海支部年表からなっている。

中でも第４部の「東海支部この15年」にかなりの頁数を費しており、同支部の歴史を見る上で非常に興味深い。

簡単に内容を紹介すると、

第１部の記録は、1975年に実施されたカラコルム・ラトック山群の記録であり、同時に行なわれた、地質、氷河調査の概報も収録されている。中でも「カラコルム通信」は、紀行風にまとめられており、ラトック主峰の登頂断念の経緯や氷河探検の苦労話等がリアルな雰囲気で読む者に伝わってくる。

第２部では、「ヒマラヤ・雪の記録」、「組織論再考」、「高所順化」、「ネパール人との出合い」の４つの論文がまとめられる。

原真氏の「組織論再考」は、氏がすでに「遥かなる未踏の屋根」の中で発表している「遠征運営論」と合せて読むと興味深い。

氏は、先の「遠征運営論」の中で２つの疑問を残していたが、この「組織論再考」の中では疑問が確信となって顕れている。

「第１は、－いくら組織論を云々しても、中心になる個人の力量（リーダーシップ）が駄目なら、それは駄目な組織である。－

第２は、－人間は教育では変らない。したがって、誰でもがリーダーになることはできない。あるいは、人間は決っして公平にはできていない。あるいは、人間は本当に解り合うことはない。

すなわち、誰がやっても同じ結果が得られるような、すばらしい組織運営法はない。組織を構成する個人によって組織の質は決る。なかんずくリーダーの影響力は、よきにつけあしきにつけ、決定的である。」

組織の運営法にどんなによい方法があっても、各個人のやり抜く意志がなければどうにもならないということが、氏の文を読むたびに感じられる。

「高所順化」および「ネパール人との出合い」は、ジーン・リボリアとトニー・ハーゲンの邦訳論文である。

「高所順化」は、東海支部で翻訳したもので、専門的知識を要せずとも理解できるものであり、また「ネパール人との出合い」は－「ネパール・ヒマラヤ中の王国」－より抄訳したもので、「東海山岳第２号」の「ネパール 史の概観」と合わせるとハーゲンの著した主要な部分を読むことができる。

第３部の紀行では、カシミール・コラホイとパミールが収録されており、第２部の論文を読み終えた後には、気楽に読み進めることができる。

第４部には、先にも記したように約半分の頁を費しており、東海支部が設立されてから現在までの同支部の歴史を綴っている。

15年間に綴られた３冊のルーム・ノートからの抜すいを中心に、東海支部活動の“陰の声”であり、隠れた記録である。原氏と沖氏の対談も読ませる。

この15年間に同支部は、アコンカグア、マカルー、ラトック・パミールと遠征を実施してきたが支部設立からこれらの遠征が実施されるまでの紆余曲折、新しく加わる者、そして去る者たちの人間模様であり、強烈に読む者の心をとらえ、その絡み合いの中へ引きずり込んで行く。

第５部は、東海支部年表であるが、第３号の年表と併せ、また第４部の東海支部この15年を読み進める上で参考にすれば、より東海支部を知ることができよう。

本書を一読すると、組織とは何か、遠征とはどうあるべきか、といったものが片々と顕れており、それが読む者に対して大きく迫ってくる。

東海支部は、いわゆる職場、地域、学校の山岳会と比べると、その組織の運営法等からまったく異質な、高次元のものが感じられる。しかし、その中には個人の能力によるタテ割りがあり、それが緊張と対立を生み出していたのではなかろうか。

彼らは、その緊張と対立を剪除するのではなく、自らのエネルギー源として現在の東海支部を築いてきた。

まさに日本山岳東海支部は、組織、遠征のありかたなどの複雑かつ大きな問題を、研究素材として我々に提供しているといえよう。　（伊東満）

HAJの本特約書店紹介――その2

札幌・成美堂書店

成美堂書店は札幌で最も賑やかな四番街にある。駅前通りを南下して三越前（四丁目十字街）を過ぎ狸小路を横切ってススキノ十字街の少し手前、左側にある。地下街ポールタウンを南進すると「成美堂」の矢印標示があるのでその階段を登ってもよいし、地下鉄ススキノ駅から北進してもよい。ブルーの外壁に白字で「成美堂」と共に「〝岩波書店〟の図書」と、由緒ある夏目漱石の書体で掲示されている。これはこの店の川人社長が岩波書店と交渉して全国で唯一店掲げられているものだそうである。

一階は新刊書フロアで一目みてこの店の特徴が岩波書と山岳書であることがわかる。山岳書コーナーは横1m高さ2.7m、すでに隣の列に越境しておりHAJ出版物が最も手に取り易い位置に並べられているのも嬉しい。2階は古書フロアでここにも山岳書コーナーがある。

4年程前に「山岳古書展示即売会」が開かれたが、その後主人はあまり書棚に並べなくなった。それというのも主人は実に頑固な「お客主義」で業者の抜き買いやセミプロの投機買いを嫌うからでもある。第2回目の即売会が楽しみであるがこの主人は商売抜きで山岳書を愛し、読み、学ぶ方だけにいつのことになるのやら……。

川人社長は大正の末期12才で札幌の古書店に住込みの丁稚奉公に入り、やがて乏しい睡眠時間を削って早大通信講座で独学をはじめた。この苦しい時代に、何かとこの少年を励ましてくれたのは当時まだ若く北大山岳部にいた佐々保雄氏であり、この岳人を通じて人の道、男の生き甲斐、山の魅力を学んだという。現在でこそ四番街振興会の重鎮であるがここに至るまでの艱難辛苦は一冊の立志伝でも足りない。温和な人柄からはとうてい昔の労苦を知る由もないが、今は、東京の大学を出てから神田悠久堂で実習した長男の義信氏を古書部に、また司書の資格をもつ次男の正美氏を新書部に配して、ご自分は専ら地域の振興に奔走されている。ともあれ地元の山岳書愛好家は主人の蔵書とも言える、山の稀購本の開放される日を待っている。（A）

成美堂正面・札幌市4番街

店主　川人宇三美さん

AIUのトレッキング用海外旅行保険

この保険は、トレッキングをふくむ旅行期間中のケガや病気による医療費、死亡金をお支払いいたします。ただし、ザイル、ピッケル、アイゼンなどを使用する登山行動中の事故はカバーいたしません。

保険料はタイプおよび期間で決ります。3タイプのうち1タイプをお選び下さい。申込書の「旅行目的」の欄に「Trekking」とタイプ名（A、B、C）をお書き下さい。申込書はHAJ名古屋事務所にありますので、出発前1カ月以前にお問合せ下さい。

保障の内容		Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
傷害	死亡・後遺障害	500万円	1,000万円	2,000万円
	傷害治療実費	200万円	250万円	300万円
疾病	疾病治療実費	200万円	250万円	300万円
	疾病死亡	500万円	500万円	500万円

なお、保険期間の数え方としては、初日は算入しません。たとえば11月10日から11月24日までの旅行ですと、保険期間は14日間。また、普通の観光などを目的とした海外旅行のための保険も扱っています。保険料は上記の約1/3になっています。

保険料金

保険期間	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
8日～10日間迄	12,150円	18,910円	30,760円
11日～14日間迄	12,650円	19,610円	31,760円
15日～17日間迄	12,960円	20,020円	32,320円
18日～21日間迄	13,510円	20,820円	33,520円
22日～24日間迄	13,920円	21,330円	34,180円
25日～27日間迄	14,490円	22,160円	35,410円
28日～1カ月間迄	14,740円	22,510円	35,910円

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

★シルクロード 6,000キロ
★ネパールとアフガニスタン
★砂漠の国アフガニスタンと最後の桃源境フンザ
★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで—— 一般登録372号

㈱トラベル ジャパン

〒100 東京都千代田区有楽町2－2－1
ラクチョウビル5F 電話（03）572-1461
担当——外池（そのいけ）・小島・丹羽

海外登山，トレッキングに傷害保険を

海外旅行傷害保険（運動危険担保特約付）について研究しております

岳（タケ）産業にご相談して下さい！

すべての保険を取扱い安心と笑顔を売る岳産業の西田までご連絡下さい

自動車・火災・レジャー（山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット）・普通傷害・利益・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。

大正海上火災保険（株）代理店 岳（タケ）産業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号
TEL 06〔304〕1115番 〒532 西田繁造
● 地下鉄西中島南方駅または国鉄新大阪駅下車徒歩5分

昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）

発行者　柴田金之助　名古屋事務所
編集「ヒマラヤ」編集委員会　東京事務所

大自然の神秘と雄々しさ、ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はブータン・シッキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノー・公害

時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花園の美しさ。海抜4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウット湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。

ダージリン

ヒマラヤのリゾートタウン「ダージリン」は海抜2134mの高地にあります。インドの上流階級や外国人たちの別荘も多く、健康的な雰囲気にあふれた街。このダージリンの南東わずか11キロの地点にあるタイガー・ヒルから望むカンチェンジュンガ（世界第3位）やエベレストの偉観は、文字通り世界最高のもの。見る人の心に衝激にも近い感動を与えずにはおきません。

シッキム

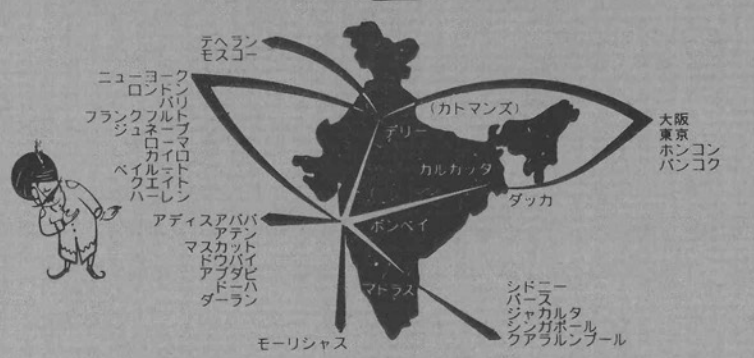
ごく最近まで鎖国状態であったシッキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはここのことです。王宮を中心に神秘の国が、静かなたたずまいを見せています。

ダージリンからの途中にあるカリンポンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。

〔註〕シッキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要です。詳しくはエア・インディアにお問い合せください。

ガルワル・トレッキング

ガルワル地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビー（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫"花の谷"や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする——
エア・インディア
東　京●千代田区有楽町日比谷パークビル〒100☎214-7631
大　阪●東区備後町松豊ビル〒541　☎264-1781
名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450☎583－0747
福　岡●博多区博多駅前八重州博多駅前ビル　☎092－471－7172